

曲目解説

●オーメンズ・オブ・ラブ
Omens of Love

和泉宏隆
Hiroataka Izumi

日本のフュージョン・グループ「T-SQUARE」の、キーボード奏者、和泉宏隆が作曲、これを、全日本吹奏楽コンクールの課題曲を始め、数多くの吹奏楽作品の作曲・編曲や、バンド指導で実績を持つ作曲家、真島俊夫が、吹奏楽版にアレンジ(編曲)したのが、この作品である。

スケールの大きな4小節のイントロ(前奏)で始まり、スピード感あふれる流れるようなメロディが続く。92年にリリースされたCD「CLASSICS」では、オーケストラ版に編曲されて収録された実績も持っている。たまには、このような作品も、耳を傾けて聴いてみたい。

●歌劇「ナブッコ」序曲
Nabucco - Overture

ジュゼッペ・ヴェルディ
Giuseppe Verdi

G. ヴェルディ(1813-1901; イタリア)は、ロマン派最大のオペラ作曲家である。1840年、若きヴェルディは、妻と幼い2人の子供を相次いで病気で失い、失意のどん底にあった。そんな悲しみを忘れさせ、勇気づけたのが、1843年2月にミラノで初演された「ナブッコ」(全4幕)の大成功で、これがヴェルディにとって出世作となった。その内容は、新バビロニア王のナブッコが、神の怒りに触れて死ぬというもので、旧約聖書をモチーフ(題材)にした悲劇の序曲である。吹奏楽版は若手作曲家F. チェザリーニ(b. 1961; スイス)によるもの。

●歌劇「ローエングリン」より「エルザの大聖堂への行列」
リヒャルト・ワーグナー
Lohengrin - Elsa's Procession to the Cathedral Richard Wagner

R. ワーグナー(1813-1883; ドイツ)は、バイエルン国王のルードビヒ2世の庇護を受け、多くの作品を残した19世紀の楽劇作曲家。この作品は、歌劇「ローエングリン」に登場するワンシーンなのだが、詳しい解説文が発見出来なかったので、詳細は省略させて頂きたい。(エルザがローエングリンという騎士に嫁ぐというシーンらしい)今回演奏する吹奏楽版は、L. カイリエにより編曲されたものである。

●交響詩「モンタニャールの詩」 ヤン・ヴァンデルロースト
Poeme Montagnard Jan Van del Roost

J. ヴァンデルロースト(b. 1956; ベルギー)は、吹奏楽だけでなく、多岐に渡る分野の作品を書いている作曲家で、日本でも高い人気を有している。この作品はイタリア北部、ヴァレ・ダオスタ州の州都アオスタにある市民バンドが委嘱したもので、1996年に作曲された。

この地方の歴史や風土、そして、かつてこの地方を統治した1人の女性の名前が付けられている1枚の歴史的絵画「カトリーヌ・ドゥ・シャラン」の気高さから得た印象がモチーフ(題材)に採られている。導入部はヨーロッパの屋根とうたわれるモンブランの厳しい自然が表現され、やがて、歴史上この地方を巻き込んで繰り返されて来た戦いや、ルネッサンス・ダンス、「カトリーヌ・ドゥ・シャラン」の生涯で、常に大きな役割を果たしたであろう“愛”が表現されていく。最後は劇的なクライマックスへと突き進み、曲は結末を迎える。

●吹奏楽のための「交響曲第1番」 クロード・スミス
Symphony No.1 for Band Claude T.Smith

C. T. スミス(1932-1987;アメリカ)は、派手な演奏効果を利用した独特な手法で数多くの吹奏楽作品を残した。この作品は、アメリカの学生バンド友好団体である「カッパ・カッパ・プシ」と、「タウ・ベータ・シグマ」の委嘱により、1977年に作曲されたもの。全4楽章から成る交響曲で、第1楽章「フローリッシュ」、第2楽章「マーチ」、第3楽章「リリック・ソング」、第4楽章「トッカータ」から構成されている。

●祭礼の舞 デイヴィット・ホールジンガー
Liturgical Dances David R.Holsinger

D. R. ホールジンガー(b. 1945;アメリカ)は、数多くの吹奏楽作品を書いており、根強い人気のある作曲家。現在は教会音楽家を務めるかたわら、指揮者、クリニシャンとして活躍している。この作品はセントラル・メソジスト大学の委嘱により書かれたもので、1984年に出版された。ホールジンガーの独特な雰囲気を持った作品である。

●ゴールデン・フェスティバル序曲 ジェームズ・バーンズ
Golden Festival Overture James Bernes

J. バーンズ(b. 1949;アメリカ)は、カンザス大学の作曲の教授を務めており、日本でも人気の高い作曲家の1人である。この作品はアメリカ陸軍野戦軍楽隊の創立50周年を記念して委嘱されたもので、1997年に出版された作品である。技術的に高度な内容を持っている。短い前奏の後、スピード感あふれる華やかな前半部が展開される。中間部は一転してロマンティックな雰囲気となり、バーンズらしい大変美しく感動的なメロディが現れる。最後はスピードを取り戻し、力強いエンディングへと突き進む。大変素晴らしい作品である。

●ゴースト・ダンス クシンシー・ヒリアード
Ghost Dance Quincy C.Hilliard
(I. Invantation II. Dance of Ghosts III. The Massacre)

Q. ヒリアード(アメリカ)は、サウスウエスタン・ルイジアナ大学で音楽理論の教授を務める黒人作曲家である。この作品のタイトルの「ゴースト・ダンス」とは、19世紀後半にアメリカのインディアンの間に広まった宗教のことである。オーガスタナ大学バンドの委嘱により作曲された全3楽章から成る作品で、1996年に出版された。

19世紀後半、インディアンは白人に土地を追われ、苦しい生活を強いられていた。そんな中で広まった「ゴースト・ダンス」の信仰は、「死者から教わった踊りに熱中するとき、死者は復活し、白人から自分たちの土地を取り戻してくれる」というものであった。しかし1890年、これを戦いの宗教を誤解したスー族の一部が、白人に戦いを挑むが、追いつめられ、皆殺しにされてしまう。唯一、倒れた母親にかばわれるようにして、泣いていた赤ん坊だけが、生きて発見された。

第1楽章「呪文」は死者復活の祈り、第2楽章「亡霊たちの踊り」は、「ゴースト・ダンス」の熱狂的な踊り、第3楽章「大虐殺」は、虐殺の光景を表現したもの。最後は深い悲しみの中、静かに結末を迎える。2本のオカリナが全曲を通して重要な役割を果たす。名曲である。